

Prevalence of and risk factors for low bone mineral density in Japanese female patients with systemic lupus erythematosus

古川, 牧緒

<https://hdl.handle.net/2324/1560386>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

(別紙様式2)

氏名	古川 牧緒			
論文名	Prevalence of and risk factors for low bone mineral density in Japanese female patients with systemic lupus erythematosus			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	岩本 幸英
	副査	九州大学	教授	加藤 聖子
	副査	九州大学	教授	鴨打 正浩

論文審査の結果の要旨

日本人の全身性エリテマトーデス(SLE)の女性患者における骨密度(BMD)低下(骨粗鬆症またはオステオペニア)の有病率と危険因子を検討することを目的とした。

腰椎と股関節で二重 X 線吸収分析法によって BMD 測定を行って、58 例の SLE 患者において基本的なおよび生活様式関連の臨床および治療に関する特徴を調査した。SLE 患者における BMD 低下と選択された因子間の関連についてのオッズ比(ORs)と 95%信頼区間(CI)を評価した。

平均 BMD \pm S.D.は、腰椎において $0.90\pm 0.17\text{g/cm}^2$ と股関節において $0.76\pm 0.17\text{g/cm}^2$ であった。オステオペニア(2.5 S.D. <T スコア<1 S.D)の有病率は 50%であり、骨粗鬆症(T スコア<2.5 S.D)の有病率は 13.8%であった。年齢と罹患期間による調整後、全体の BMD 低下(T スコア<1 S.D)の危険因子として分娩回数(OR=5.58、95%CI=1.31-26.06;P=0.02)を、腰椎の BMD 低下のための予防因子として経口コルチコステロイドの最大投薬量が 50mg/日より多いこと(OR=0.25、95%CI=0.07-0.91;P=0.035)を同定した。

BMD 減少、特に脊椎海綿骨における減少が、日本人の SLE 女性患者、特に分娩歴を持つ患者において判明した。高用量経口コルチコステロイド投与の既往歴が腰椎における BMD の保持と関連していた。しかし限られたサンプルサイズを考慮して更なる検討が必要である。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、結果などについての説明を求め、各委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行なったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格とした。